

鳥取大学所蔵の考古資料（４）  
—古墳時代の遺物：郷原１号墳出土遺物—

高田 健一

Archaeological Collections of Tottori University (4)  
— Artifacts of *Kofun* period : Artifacts from *Gobara* tumulus —

TAKATA Ken-ichi

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 第18巻 第3号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol. 18 / No. 3

令和４年 3月25日発行 March 25, 2022

# 鳥取大学所蔵の考古資料（４）

## － 古墳時代の遺物：郷原 1 号墳出土遺物 －

高田健一\*

### Archaeological Collections of Tottori University (4) — Artifacts of *Kofun* period : Artifacts from *Gobara* tumulus —

TAKATA Ken-ichi\*

キーワード：学校所在考古資料，古墳時代中期，箱形石棺，土師器高坏，鉄刀，刀子

Key Words: Archaeological collections in school, Middle *Kofun* period, Cist, Pedestaled *Haji* dish, Iron sword, Iron knife

#### I. はじめに

鳥取大学地域学部は、1966（昭和 41）年の教育学部、1949（昭和 24）年の学芸学部、戦前の鳥取師範学校等にその源流があり、それらの前身組織から多くの考古資料を引き継いでいる。これらを適切に資料化し、意義付け、公開と保存を図っていくことを目的に、「鳥取大学所蔵の考古資料」と題する報告を本誌上で行なってきた<sup>1)</sup>。今回紹介するのは、郷原 1 号墳出土資料である。

郷原 1 号墳は、鳥取市河原町郷原上山の丘陵に所在した円墳である（図 1）。この古墳は、1955 年 12 月下旬に、古墳所在地付近の果樹園拡張をきっかけとして、鳥取大学歴史学研究会に所属する学生らが発掘調査を行なったものである。調査時にはすでに石棺の存在が知られており、掘削されていたが、土師器高坏や鉄刀などの副葬品の一部は残っていた。調査成果は、同研究会が発行した『鳥取県東部に於ける古墳調査報告』第 1 輯<sup>2)</sup>（以下、『報告』）に記載があるほか、佐々木古代文化研究所が発行した月報『ひすい』50 号（以下、『ひすい』）に報告が掲載されている（大村ほか 1958）。

その後、出土遺物は鳥取大学で保管されてきたが、現在確認できる遺物としては、土師器有稜高坏 1 点、鉄刀 2 点（破片数 4 点）、刀子 1 点（破片数 2 点）が残るのみである。本来存在した土師器椀形高坏 3 点（破片数 4 点）は、1986 年発行の『鳥取県の古墳』（鳥取県埋蔵文化財センター 1986）に写真が掲載されているものの、現物は行方不明である<sup>3)</sup>。

1988 年に作成された鳥取大学所蔵の文化財リストでは、「高坏と鉄刀がある。」としか記されていないので、実数や状態がわからない（平勢 1988）。1980 年代後半以降になんらかの保管状況の混乱があったと考えられる。

2020 年に刊行された『新鳥取県史・考古 2 古墳時代』には、郷原古墳群の一資料として取り上げられ、現存する土師器高坏の再実測図が掲載されたが、鉄器類は、鳥取市河原町向羅 1 号墳出土鉄器との混乱があり、資料弁別に時間を要したため、資料化が間に合わなかった。そのため、『ひすい』掲載図の引用にとどまっている。所蔵者としての責を果たすため、ここで現存する遺物の資料化を図り、合わせて古墳の位置付けについて若干の検討を行ないたい。

なお、遺物の現状は、有稜高坏については、出土時には口縁を打ち欠いた状態の坏部に対して石膏復



図 1 古墳の位置図

\*鳥取大学地域学部地域学科



図2 郷原古墳群周辺の古墳

表1 郷原・山手古墳群一覧

	墳形	規模	埋葬施設	時期	文献
郷原1号墳	円	8.0m	箱形石棺	中期後葉	大村ほか1958
郷原2号墳	円	8.5m	不明		
郷原3号墳	円	15.0m	不明	TK209-	谷口2006
郷原4号墳	円	9.0m	不明		
郷原5号墳	円	12.0m	不明		
郷原6号墳	円	11.0m	不明		
郷原7号墳	方円	30.5m	不明		
郷原8号墳	円	20.0m	不明		
郷原9号墳	円	15m	不明		
郷原10号墳	円	8.5m	土壇墓	中期後葉	谷口2006
郷原11号墳	円	7.3m	木棺	TK43-TK217	河原町教委2004
郷原12号墳	円	9.0m	不明		
郷原13号墳	方	19.3*14.8m	消失	中期中葉	谷口2006
郷原14号墳	方	16.6*13.8m	木棺	中期中葉	谷口2006
郷原15号墳	円	7.0m	消失		谷口2006
今在家古墳	円	11.0m	箱形石棺	後期か	河原町誌編集委員会1986
山手1号墳	円	不明	不明	中期か	河原町誌編集委員会1986
山手2号墳	円	6.7m	箱形石棺		
山手3号墳	円	13.0m	不明		
山手4号墳	円	13.0m	不明		
山手5号墳	円	13.0m	不明		
山手6号墳	円	12.0m	不明		
山手7号墳	円	23.5m	木棺か	中期前葉～中葉	河原町誌編集委員会1986

元が行なわれている。鉄器類は、出土後に何らかの保存処理が施された形跡があり、処理時に付けられたと思われる荷札とシールが付属する。数10年来、適切な温湿度管理がない状況で保管されてきたにしては、現状は安定しているが、一部は針金巻きして分離を防いでいる状況であり、本格的な保存処理と修復が必要な状況と言える。

## II. 古墳の概要

### 1. 周辺の遺跡

1号墳の調査から半世紀以上経った今日では、周辺の遺跡が発掘調査されてこの古墳を取り巻く歴史的環境を検討する情報は大幅に増えている。

まず、三谷川を挟んで向かい合う丘陵に分かれて存在する15基の古墳が郷原古墳群とされている(図2, 表1)。1号墳は、南側丘陵の裾部に位置しており、同じ丘陵では11, 13, 14号墳が、北側の丘陵では3, 10, 15号墳が2000年代以降に発掘調査されている。このうち、10, 13, 14号墳は、出土した土器から中期中葉～後葉に位置付けられ、1号墳と前後する時期の古墳が複数存在することが知られる。とりわけ、14号墳は、1号墳と同様な土師器高杯を転用した枕が出土していることに注目できる(谷口2006)。

三谷川の西側に位置する丘陵部には山手古墳群が存在する。古く出土品が知られた古墳として1号墳(別名:天神山古墳)、7号墳(別名:若宮古墳)<sup>4)</sup>にはいずれも銅鏡があり、地域内でも有力な古墳群だった可能性がある。1号墳は、「盤龍鏡, 勾玉, 鉄鎌」が出土したというが、いずれも行方不明でどのような型式か定かでないため、時期はよくわからない。一方、7号墳の銅鏡も現在は行方不明であるが、写真が残されており、倣製盤龍鏡と考えられる(河原町誌編集委員会1986)。内区は向かい合う2頭の虎と考えられる獣像をモチーフとし、内区外周に擬銘帯を設ける。

外区は、平縁で、外側から順に珠文帯, 複波文帯, 鋸歯文帯を施している。内区主文は、倣製鏡としては中国製の盤龍鏡をかなり忠実に模倣した部類に入り、下垣仁志は盤龍鏡1系の古い段階に位置付けている(下垣2003)。類例に滋賀県栗東市新開1号墳出土鏡があり(滋賀県1961), 類似する時期とすれば、中期前葉～中葉に位置付けられよう。

一方、郷原古墳群の北側丘陵に展開する加賀瀬古墳群は、これまでに出土遺物が知られていないため、時期など不明な点が多いが、墳丘規模が径 20 m を超える円墳が複数含まれるようで、他の古墳群よりも有力な可能性がある。

現状では、明確に前期の古墳はみあたらない。三谷川流域の三つの古墳群が同時に展開するのか、時期差があるのかわからないが、少なくとも山手古墳群と郷原古墳群は、中期以降に古墳の築造が活発化し、後期にも継続していくと考えられる。郷原 1 号墳は、この地域で中期に台頭してきた有力者層の重要な一角をなすと考えられる。

なお、古墳の北側では、郷原第 1 遺跡が調査されており、中期前半段階に位置づけられる竪穴住居跡などが検出されている(中島 1986)。また、北側にある丘陵上では、山手森谷上分遺跡が調査されており、ここでも中期後半から後期段階の竪穴住居跡が検出されている(横山 2020)。古墳とほぼ同時期の居住域が近傍に展開していたことが知れる。

## 2. 1 号墳の概要

1 号墳は、調査時には径 8 m、墳丘高 1 m であったと観察されている。墳丘に対する調査は行なわれていないので、実際の規模はわからないが、鳥取県の遺跡台帳によると、1976 年の時点でも果樹園内に墳丘が残されていたようで、径 15 m、高さ 2.3 m と観察されている。埋葬施設の規模からすると、後者の方が実態に近いのかもしれないが、いずれが正しいか判断できない。

1 号墳の中心埋葬施設と考えられる箱形石棺は、内法で全長 3.4 m、幅 1.0 m、高さ 0.7 m の規模をもつ、全国的に見ても最大規模の箱形石棺である(図 3)。蓋石は、『報告』に「北側に少しあったのみ」と記述され、すでに大半が失われていた。また、同じく『報告』には、遺物検出の翌日に棺内の掘り下げを行なって「底を完全に」出したとあるが、底面に関する特別な記述はなく、板石敷や礫敷などはなかったようである。南側の 3 分の 1 は既掘のため、北側で認識された床面がなかったという記述があるので、地山などの硬い基盤層が床面だった可能性が考えられる。

石棺の長側壁は、複数の板石で構成されているが、隣接する石材相互に重なりはない。短辺側の小口石は、北側は 1 石で南側は 2 石用いている。長側壁との関係では、長側壁の端部に接するような配置である。清家章の分類指標では、長側壁複数・ロ字形小

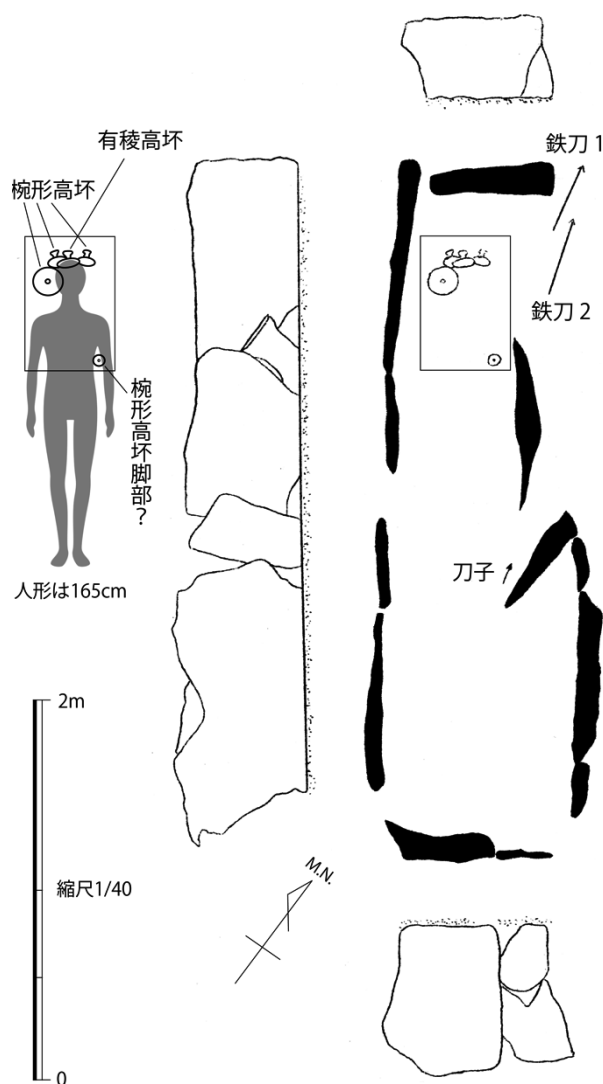


図 3 箱形石棺と遺物の出土状況

口・無底石タイプとなる(清家 2010)。これは、古墳時代の因幡地域で比較的良好にみられる。

西側壁は概ね原位置を保っているようであるが、東側壁は内側に大きく倒れ込んでおり(PL.1-2)、棺幅の変化はよくわからない。図上で小口板の長さを測ると、南側が 0.88 m、北側が 0.64 m であり、南側が広く作られた可能性がある。このことから、南頭位を主要埋葬として構築され、土器器枕がある北側の埋葬は 2 次的なもののみなせる可能性がある。内法長が 3 m 以上あるということは、本来は、同棺複数埋葬であった可能性も考慮する。このことは、棺内北側で検出された土器器高坏の位置が棺の中軸よりもやや西側に偏っているように見える点からも考えうることである。

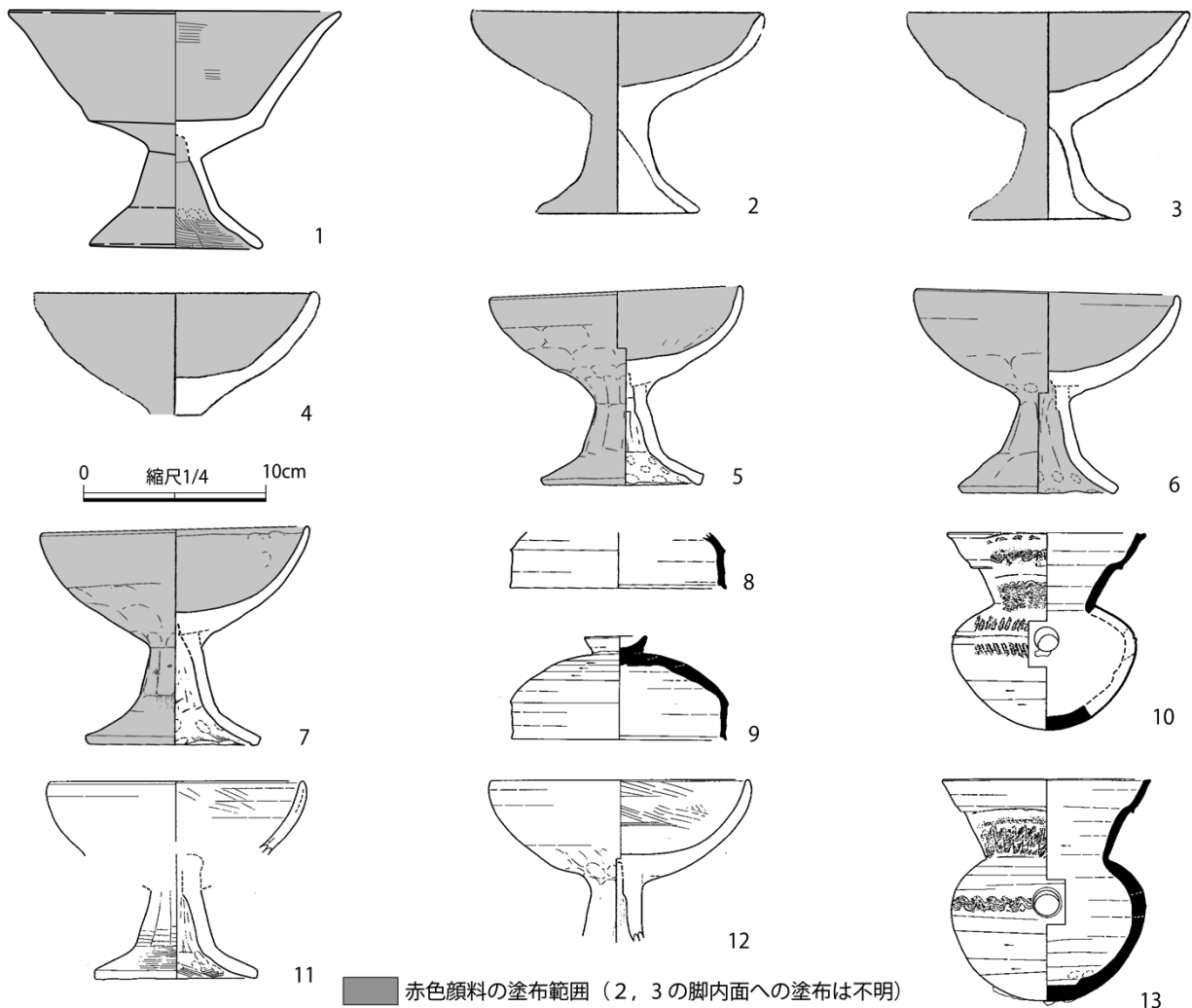


図 4 1号墳出土の高坏と類似資料及び共伴する須恵器

### 3. 遺物の出土状況

棺の北側小口から約 0.3 m のところで土師器高坏 4 点が出土している。これは、有稜高坏 1 点、椀形高坏 3 点からなる。坏部を南側に向けて倒した有稜高坏を中央に据え、同じく坏部を南側に向けて倒した椀形高坏 2 点でこれを挟み込んで枕としている。各高坏の口縁部は一部を欠いてあり、それによって組み合わせた際の密着性を高めている (PL.1-3)。

3 個の高坏が被葬者の頭部上半を覆うようにあったとして、被葬者の身体位置を推測すると、もう 1 点の椀形高坏は被葬者の右頬あたりに添うように置かれていたと考えられる。これは、坏部のみが伏せて置かれていたようで、口縁部を欠いていない。

この高坏の脚部と考えられるものが被葬者の左上腕付近と思われる場所から出土している。写真では倒れて出土したようにも見える。鳥取市糸谷 3 号墳

や同横枕 72 号墳のように、高坏脚部のみを枕として利用する場合がある (森ほか 1994, 谷口 2003)。無論、断定はできないし、もはや検証の方法もないわけだが、これが別の埋葬に対する枕としてあった可能性は考慮する必要があるだろう。

鉄刀 2 点が棺の北東隅から出土している。北側小口からはみ出るかのような位置であり、石棺材が失われた場所でもあるので、出土位置が本来のものかどうか疑問がある。切先が北向きであるかのような表現がなされているが、後述するように、切先の理解と、破片の接合状況に修正が必要である。これらの点を考慮すると、本来の副葬位置をとどめていない可能性が高い。

また、刀子が棺の中央からやや南の地点で出土している。上述のように、棺の南側は攪乱を受けていると考えられるが、刀子の出土位置が大きく動いて



いないとすると、棺の南側も本来は副葬品などが存在する空間だったことを示しているのであろう。

### Ⅲ. 出土遺物

#### 1. 土師器

出土した土師器 4 点はいずれも高坏である。有稜高坏 1 点と椀形高坏 3 点があったが、前述のように、椀形高坏は行方不明である。それらに関する情報は、『報告』掲載写真、『ひすい』掲載図の他には、『鳥取県の古墳』掲載写真以外にない (PL.1-4, 5)。ここでは、既報告と写真類から判読できる内容を元に概要を整理しておきたい。一方、有稜高坏は現存するため、再実測の上、観察結果を記しておく。

有稜高坏は、口径 18.0 cm、高さ 13.0 cm を測るものである (図 4-1, PL.2)。坏部は、平らな底面から直線的に広がる口縁部があり、端部近くでわずかに外反し、薄く伸ばす。坏部の深さは、6.0 cm ある。脚部は、中程で屈曲する円錐形を成し、底径は 9.2 cm である。脚部上半部は、縦方向のミガキ調整により面取りがなされたような外観を示す類例が多いが、本例の場合はそのような外面調整は見られない。

土器の表面は基本的にナデ調整が施されているが、坏部内面には粗い横方向のハケメが観察できる (PL.2-4)。また、脚部内面は、いわゆる蜘蛛の巣状ハケメが施されているが、このハケメも粗い。

坏部、脚部ともに内外面全体を赤色塗彩している。通常見えない脚部内面をも赤彩する事例は少ないが、本例の場合には脚部の最奥部まで赤彩されている。

脚部を坏部と接合する際、各部の中心を合わせるために、脚部を貫く棒状の部品を立てて目印とする製作技法がとられたと考えられている (松山 1991, 井殿ほか 1996)。脚部の最奥部をのぞくと、坏底部に「棒」の刺突痕が見えるが、刺突痕は二つあり切り合っている (PL.2-5)。位置合わせをやり直したものであろうか。

椀形高坏は、既報告によると口径 15.4~15.8 cm、高さ 10.8~11.2 cm を測る (図 4-2~4)。有稜高坏と組み合わせられていた 2 点は坏部と脚部が一体であったが (図 4-2, 3)、残りの 1 点は、坏部と脚部が分離した状態で出土した (図 4-4)。この分離した坏部と脚部が同一個体であるかどうかは、既報告に記述がないのでわからない。『鳥取県の古墳』掲載写真で見ると、同一個体と見ても違和感はなさそうである。

形状や大きさが類似する類例を探してみると、坏部の大きさや器高がよく類似するのは、横枕 26 号墳

例である (図 4-5~7, 谷口 2003)。また、倭文 6 号墳例は完形でないため、器高は比較できないが、坏部形状や大きさが近似する (図 4-11, 12, 山田 2004)。

#### 2. 鉄器

現存する鉄器は、鉄刀が 2 本 (破片 4 点)、刀子片と考えられるものが 2 点ある (図 5, PL.3)。鉄刀は、『ひすい』掲載図と比較すると、大きく損なわれていないと考えられるが、旧報告でなされた切先の向きや、破片の接合関係に訂正が必要である。

1 は、旧報告と切先の理解が逆である。先端部は欠損しているが、ふくらの形状は残存している。残存長 43.8 cm、刃部幅 3.0 cm を測る。さび割れのために膨らんで旧状を留めない部分もあるが、背の厚さは、1.0 cm あると考えられる。なお、1 の下端部には長さ 4 cm ほどの破片が接合する<sup>5)</sup>。

もう 1 本の鉄刀は、切先方向の理解に変更はないが、『ひすい』掲載図 3 の上部 3 分の 2 は刃部であり (図 5-2)、下部 3 分の 1 の茎 (図 5-3) とは接点がないことが判明した<sup>6)</sup>。

2 は現存長 30.8 cm で、刃部幅 3.7 cm を測る。厚さは 1.0 cm で 1 と同じであるが、刃幅がやや大きい鉄刀で、1 とは別個体と考えられる。一方、3 の茎は、現存長 10.3 cm、幅は 2.0 cm~1.6 cm を測る。厚さは 0.5 cm で、図の下端部近くに目釘穴が存在するほか、柄木と考えられる木質の表面に柄巻と考えられる糸の痕跡が観察できる。糸の残存状態は痕跡的であるが、太さからすると、いわゆる「二本芯並列コイル状二重構造」 (澤田 2015) の糸巻きと考えられる。

小論では、3 の茎を 2 の下に置いているが、これは便宜的なものである。この茎を 1 に伴うものか、2 に伴うものかを確定することは難しい。ただし、中期後半になると茎の細いものが増加することを考慮すると (臼杵 1984)、刀身 2 との組み合わせが妥当かもしれない。もっとも、茎のみ残存した第 3 の大刀が存在した可能性も、当然ゼロではない。

4, 5 は刀子の茎片と考えられる。現存長 5.2 cm と 3.9 cm、幅 1.4 cm と 1.3 cm、厚さはどちらも 0.4 cm 程度と考えられる。いずれも両端部が欠損しており、破片の接点はないが、幅や厚さから同一個体の近い部位とみて良いだろう。既報告では、刀子の全長が 16.0 cm とされているので、全長に対する茎長の比率としては半分程度となる。渡邊可奈子が奈良盆地の事例で示した研究に照らすと (渡邊 2010)、中期の刀子としては大型であり、後期に一般化するようなサイズと考えられる。

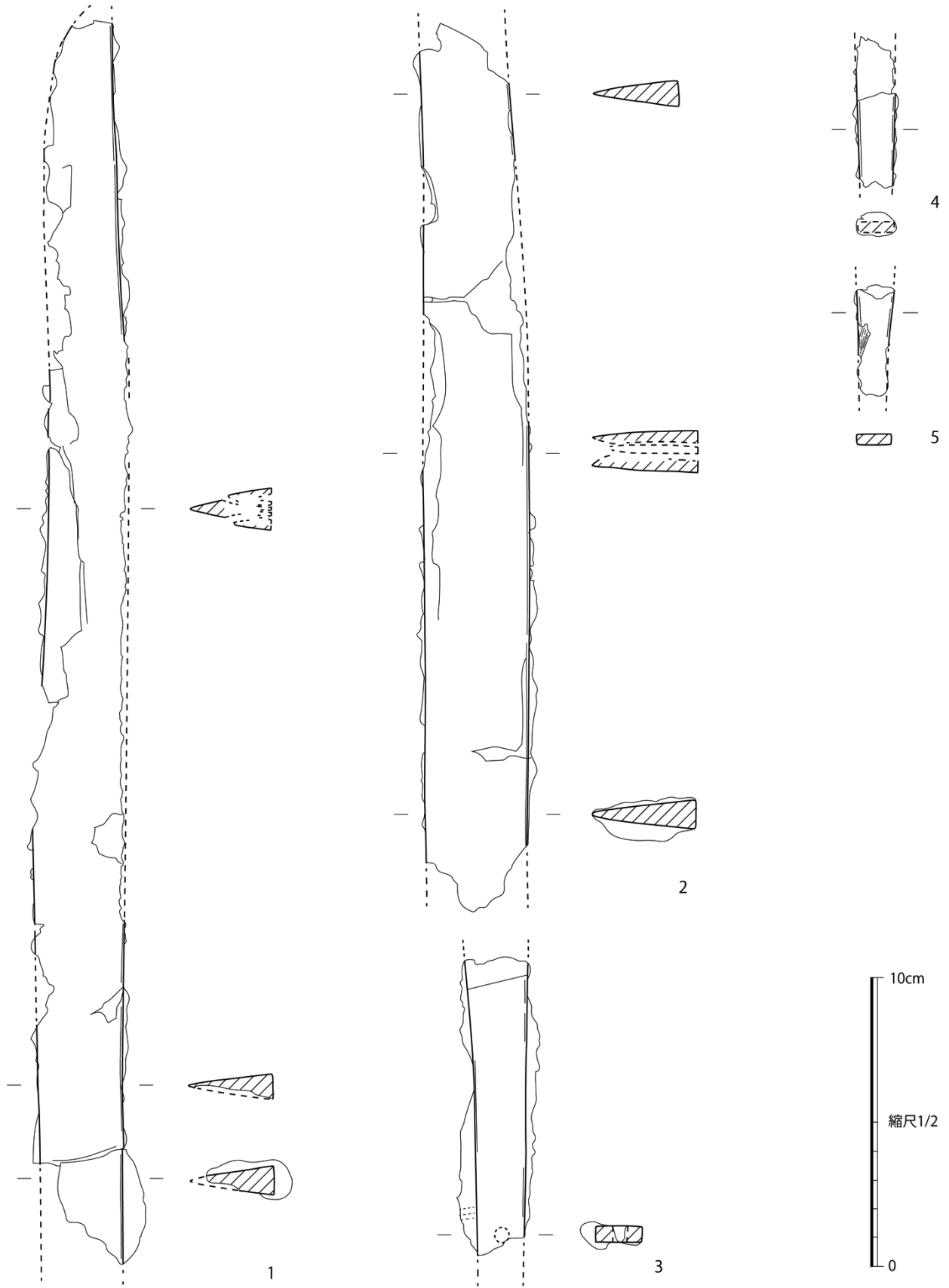


图5 鉄製品実測图

#### IV. まとめ

##### 1. 土師器高坏の編年的位置

出土した土器のうち多くは行方不明で現物を参照できない状態であるが、類例と比較しつつ編年的な位置を確認しておきたい。

因幡地域出土の有稜高坏約 30 点と椀形高坏約 70 点について (表 2, 3), 坏部の大きさを比較すると, 異なる傾向が見出せる。有稜高坏は, 口径 15 cm~25 cm と大きく差があり, これと連動して坏部高にも差がある (相関係数  $R=0.848$ )。口径 20 cm を境に大小の区別があり, 大型は坏部高が高いものが多いと考えられる。ここでは, 大型のものを 1 類, 小型のものを 2 類と細分しておく。

これに対して, 椀形高坏は, 口径に数 cm 程度の違いがあるが, 口径 15 cm 前後を中心に比較的まとまりがある。坏部高は, 口径の大小とほとんど相関をみせない (相関係数  $R=-0.045$ ) (図 6 上)。

坏部の大きさと脚部高の関係を見ても, 有稜高坏は明瞭に 2 分類可能である。1 類の脚部は相対的に高く, 7 cm 台のものが多いのに対して, 2 類の脚部は 6 cm 以下のものが多い。また, 椀形高坏は, 上述のように, 坏部形態ではばらつきが小さいが, 脚部高に注目すると, 5 cm 未満から 8 cm 程度までバリエーションがあり, 坏部口径とゆるく正の相関 (相関係数  $R=0.535$ ) がありそうである (図 6 下)。

有稜高坏の 2 類型については, 秋里遺跡 BIII区 SX01 で多量に出土した一括遺物中に両者とも存在するから (井殿ほか前掲), 単に時期差ではなく, 容量に基づく機能・用途差を含んでいる可能性が高い。一方, 椀形高坏について, 岩吉編年では脚部の短小化が編年の指標として注目されており (谷口 1991), 鳥取県中部の天神川編年でも同様である (牧本 1999)。坏部の大きさは脚部高とゆるく相関するので, 口径も時期差を反映する可能性がある。類例の中で須恵器出現以前と考える下味野 50 号墳例 (谷口 2004) などでは坏部口径が 17 cm 以上あり, 陶邑編年 (田辺 1981) の TK73~TK208 段階の須恵器が共伴する紙子谷 24 号墳 (稲浜 1994), 横枕 73 号墳 (谷口 2003) などの事例を見ると, 口径が平均値である 15 cm よりも大きいものが主流である。これに対して, TK23~47 段階

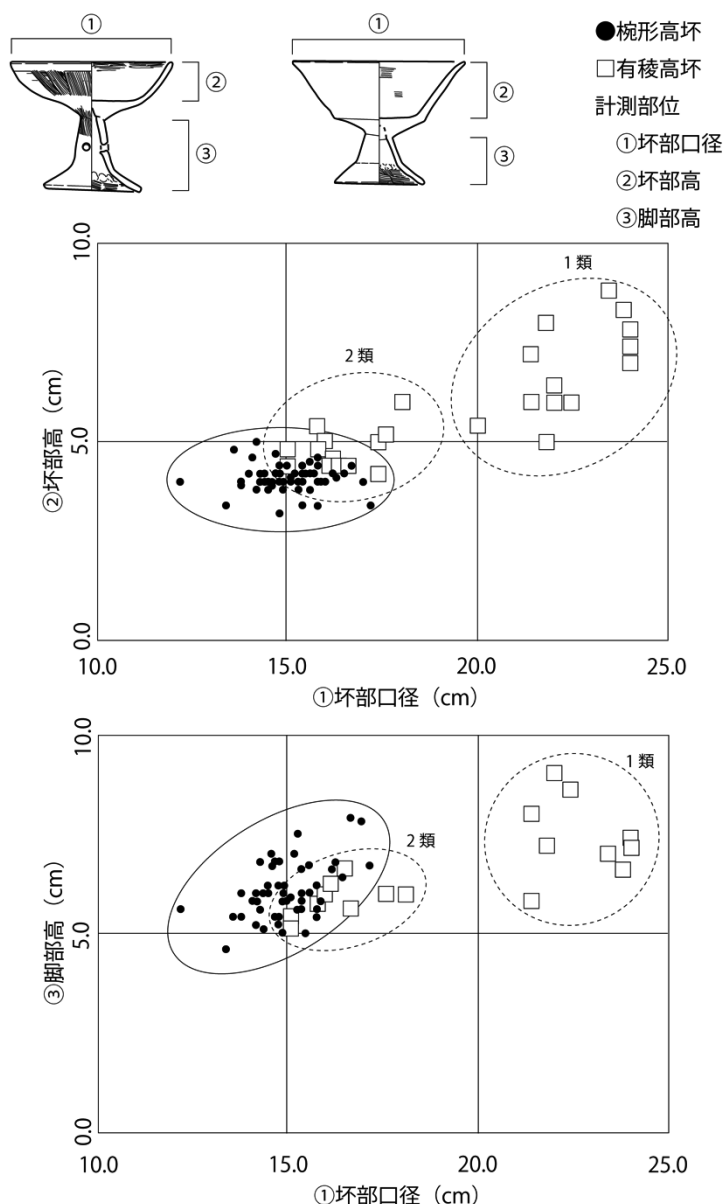


図 6 有稜高坏と椀形高坏の比較

の須恵器が共伴する横枕 26 号墳, 倭文 6 号墳, 六部山 5 号墳 (平川ほか 1991) などの事例では, 坏部口径が 14 cm 前後と小型のものが多い。

サイズ以外で高坏に見られる変異は, 土器の成形や外面調整など, 製作工程に関わる諸要素がある。これらは地域差や用途差, 製作者の技法差など様々なものに起因すると考えられるが, 時間差によっても生じ, 編年の指標となるものがあると考えられる。

有稜高坏について, 坏部内面に施される放射状暗文の有無を比較すると, 1 類では約 8 割 (13 点中 11 点) の資料に暗文が施されているのに対し, 2 類では 6 割程度 (9 点中 14 点) にとどまる。2 類には丁



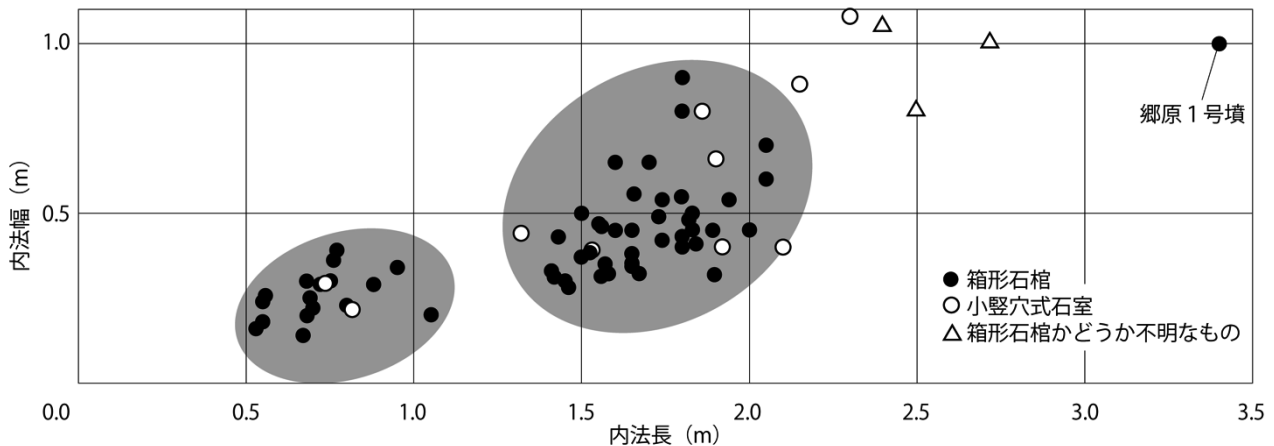


図7 因幡地域における箱形石棺の規模

寧なナデを施さず、ハケメが残るものもあることから、小型品には調整工程の省略が多い傾向があると理解できよう。2類に分類される郷原1号墳例は、やはり内面の暗文はなく、粗いハケメが残る。小型で暗文のない2類は、より新しい時期の可能性があろう。

同様な観点から椀形高坏についても検討すると、口径15cm以上のものの約8割(33点中26点)は暗文が施されているが、15cm未満のものは、暗文の比率が約6割(39点中25点)と低くなるようだ。とりわけ、TK23~47段階の須恵器が共伴する事例では、暗文などの調整が見られないため、暗文の省略が時期差の指標となる可能性がある。

また、脚部の成形・調整技法を見ると、いずれの高坏も脚部上半の柱状部に面取りが存在するものが多く、さらに、脚端部にもケズリによる面取りが施されるものがある。しかし、そのような成形・調整技法は、TK23~47段階の須恵器が共伴する事例では認められず、土師器の製作技法の形骸化が生じつつあると言える。このようにみえてくると、郷原1号墳の土師器高坏は、暗文の省略、脚部柱状部の面取りの消滅など、当初備えていた要素の欠落が多い、中期末段階の様相を示していると捉えられよう。

## 2. 箱形石棺の評価

郷原1号墳の主要埋葬施設である箱形石棺は、県内だけでなく、全国的に見ても最大級の事例である。これに匹敵するものとして、広島県三次市宮の本24号古墳のSK24-2(内法長3.23m、幅0.82m:梅本2013)、山口市朝田墳墓群VI区ST2(内法長2.95m、幅0.65m:小南2009)、大分市亀塚古墳(内法長2.8m、幅0.90m:讃岐1995)などが挙げられる。亀塚

古墳例は、全長100mを超える大型前方後円墳の主要埋葬施設であり、長側・小口ともに1枚石で構成されている点が大きく異なる。宮の本24号墳例は、副次埋葬施設ながら、直径30m、高さ4mある大型円墳の埋葬施設であり、小口が竪穴式石室的な石積みである。これらを考慮すると、箱形石棺として同列に比較することは難しいかもしれない。一方、朝田墳墓群VI区の例は、巨大さに比して、小型低方墳であること、副葬品の内容も乏しいことなどから、箱形石棺の巨大さが必ずしも階層的地位の高さと関係しない点に注意されている。ここでは、因幡地域の類例と比較してどのような位置付けが可能か、見ておこう。

鳥取県東部で発掘調査された箱形石棺の規模を見ると、内法長110cm~130cmを境に大小のサイズに分かれることが読み取れる(図7)。いずれのサイズの石棺にも人骨が遺存した例は限られるが、古墳時代には伸展葬が一般的であることから、石棺の内法長は被葬者の身長と関係が深く、成人と子どもの区別があると考えられよう。

石棺の作りは、清家が示した分類指標(清家前掲)で、長側壁複数・ロ字形小口・無底石タイプに属するものが主流である。六部山古墳群や広岡古墳群など、千代川右岸地域の一部には棺底部に石敷や礫敷を施すものが多いグループがあり、前方後円墳の副次埋葬施設の場合には側壁1枚タイプとなるものもあるが、郷原1号墳例は、因幡地域でごく普通に見られる石棺型式であると言える。

ところが、大きさで見ると、普通サイズの成人用の箱形石棺に対して、郷原1号墳例は異様に大きいことがわかる。基本構造は箱形石棺であるが、石棺

の上部構造に竪穴式石室のような石材の小口積みを行なう小竪穴式石室と呼ばれる埋葬施設の場合、通常の箱形石棺よりも大規模で内法長 2.0 m を超えるものがある。したがって、本来は小竪穴式石室であって、上部構造が破壊されたものとする、その巨大さはもう少し理解しやすくなる。

ただし、大規模なものは、損壊して正確な大きさが分からないものなど、再検討の余地を多く残すものを含んでいるし（図 7 中△印）、小竪穴式石室の事例としても、巨大であることに変わりがない。既掘を被っているとはいえ、石棺の巨大さに対して、墳丘規模の大きさや副葬品の内容は釣り合っていないように見える。

一方、長さ 3 m という規模は、木棺であれば異例なサイズではなく、同時期の周辺古墳でも類例を挙げうる。例えば、里仁 33 号墳の主要埋葬施設は、長さ 4.8 m、幅 0.55 m の箱形木棺であり（中原 1985）、下味野古墳群の SX01 は、長さ 3.03 m、幅 0.68 m の箱形木棺と推測されている（藤本 2002）。

郷原古墳群中では、14 号墳から 1 号墳と同様な高坏転用枕が出土している。先の検討からすると、1 号墳よりも一段階古い中期中葉段階に位置付けられるが、その木棺は、内法長 2.35 m、内法幅 0.47 m の規模を有する組合せ式の箱形木棺である（図 8）。

山陰地方における組合せ式木棺は、弥生時代以来、小口板を長側板で挟み込むタイプが主流であり、これは古墳時代の組合せ式木棺にも引き継がれ、前期後半以降に主流となる箱形石棺でも同様な組合せ方法を採用している。里仁 33 号墳例、郷原 14 号墳例は、小口板と長側板の関係が通例と逆で、長側板の外側に小口板を設けるものだが、これと同じ組合せの箱形石棺も少数ながら存在する。したがって、石と木で材質は異なるものの、構造的に同列の埋葬施

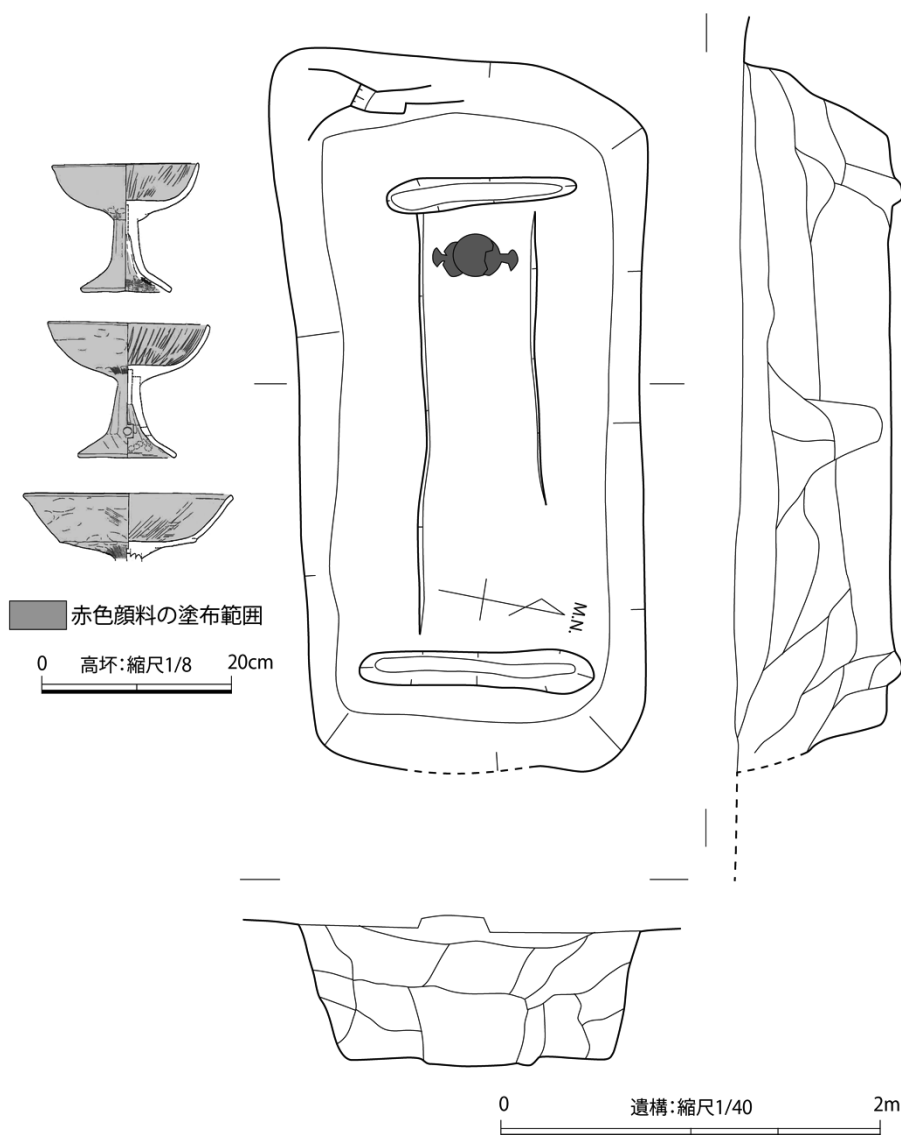


図 8 郷原 14 号墳の木棺と高坏転用枕

設と捉えることができよう。清家章も指摘しているように、箱形石棺と箱形木棺の差は、被葬者の出自や生前の職位・階層などを反映しつつも、材質の差に見るほど大きな差はないと考えられる（清家前掲）。清家が検討した近畿地方の事例の中には、因幡地域と関連の深い北近畿（特に但馬）の事例も多く含まれており、同一墳丘内での木棺と石棺の共存や、木石併用棺の存在などは、因幡地域でも類例が多い点でもある。

また、これらの棺は、墓壇内で組み立てられる「据え付ける棺」（和田 1995）であり、底板がないと考えられる点でも共通する。郷原 1 号墳の箱形石棺は、突出した規模の点で異例であるが、組合せ式箱形木棺も含めた中でみると、孤立した存在ではなくなる。

表2 検討した有稜高坏一覧

遺跡名	坏部			脚部			文献
	口径	坏部高	暗文	脚高	脚穿孔	脚端面取	
秋里BⅢ区SX01	24.0	7.0	○	7.2	×	○	井殿ほか1996 (図300-97)
秋里BⅢ区SX01	24.0	7.4	○	7.4	×	×	" (図300-111)
秋里BⅢ区SX01	21.4	7.2	○	5.8	×	×	" (図300-98)
秋里BⅢ区SX01	21.4	6.0	○	8.0	×	×	" (図300-112)
秋里BⅢ区SX01	17.6	5.2	×	6.0	×	×	" (図300-102)
秋里BⅢ区SX01	17.4	5.0	○	-	-	-	" (図300-106)
秋里BⅢ区SX01	17.4	4.2	○	-	○	-	" (図300-108)
秋里BⅢ区SX01	16.6	4.4	○	5.6	×	×	" (図300-101)
秋里BⅢ区SX01	16.2	4.6	×	6.2	×	○	" (図300-103)
秋里BⅢ区SX01	16.2	4.4	○	-	-	-	" (図300-107)
秋里BⅢ区SX01	16.2	4.4	○	-	-	-	" (図300-109)
秋里BⅢ区SX01	16.0	5.0	○	6.0	×	○	" (図300-99)
秋里BⅢ区SX01	15.8	4.8	○	5.8	×	○	" (図300-100)
秋里BⅢ区SX01	15.8	5.4	×	-	-	-	" (図300-110)
秋里BⅢ区SX01	15.0	4.4	○	5.2	×	○	" (図300-104)
秋里BⅢ区SX01	15.0	4.8	×	5.4	×	×	" (図300-105)
開地谷13号	23.8	8.3	○	6.6	×	×	東方2020 (図2-1)
開地谷13号	21.8	8.0	○	7.2	×	○	" (図2-2)
開地谷28号	24.0	7.8	○	-	-	-	" (図2-3)
郷原14号	21.8	5.0	○	-	-	-	谷口2006 (図13-3)
郷原1号	18.0	6.0	×	6.0	×	×	本論
横枕SK02	22.4	6.0	○	8.6	×	×	谷口2003 (図182-6)
横枕SK02	22.0	6.4	○	9.0	×	×	" (図182-5)
横枕SK02	22.0	6.0	×	-	-	-	" (図182-7)
横枕SK02	16.4	4.4	○	6.6	×	×	" (図182-4)
横枕73号	20.0	5.4	×	-	-	-	" (図165-3)
横枕76号	23.4	8.8	○	7.0	×	×	" (図176-1)

表3 検討した椀形高坏一覧 (1)

遺跡名	坏部			脚部			文献
	口径	坏部高	暗文	脚高	脚穿孔	脚端面取	
六部山5号	15.6	4.8	×	-	-	-	平川ほか1991 (図7-1)
六部山5号	14.9	4.2	×	-	-	-	" (図7-2)
六部山5号	14.7	4.8	×	-	-	-	" (図7-3)
秋里BⅢ区SX01	16.5	4.2	×	6.4	×	×	井殿ほか1996 (図302-138)
秋里BⅢ区SX01	16.2	4.2	○	6.6	×	○	" (図301-114)
秋里BⅢ区SX01	16.0	4.0	○	-	-	-	" (図301-116)
秋里BⅢ区SX01	15.9	4.0	○	5.8	×	○	" (図301-130)
秋里BⅢ区SX01	15.8	4.0	○	6.2	×	○	" (図301-123)
秋里BⅢ区SX01	15.8	3.4	○	-	-	-	" (図302-135)
秋里BⅢ区SX01	15.7	4.2	○	-	-	-	" (図301-122)
秋里BⅢ区SX01	15.6	4.2	○	-	-	-	" (図302-137)
秋里BⅢ区SX01	15.6	4.2	×	6.0	○	○	" (図303-150)
秋里BⅢ区SX01	15.4	4.2	○	5.8	×	○	" (図301-117)
秋里BⅢ区SX01	15.4	4.0	○	6.6	○	○	" (図301-118)
秋里BⅢ区SX01	15.4	4.0	○	6.0	○	○	" (図301-119)
秋里BⅢ区SX01	15.4	4.4	○	5.6	×	○	" (図302-132)
秋里BⅢ区SX01	15.4	4.0	○	6.0	×	○	" (図302-134)
秋里BⅢ区SX01	15.4	3.4	×	5.8	○	○	" (図303-151)
秋里BⅢ区SX01	15.3	4.0	○	5.6	○	○	" (図302-147)
秋里BⅢ区SX01	15.2	4.2	○	-	-	-	" (図301-115)
秋里BⅢ区SX01	15.2	4.2	○	7.0	○	○	" (図301-120)

表3 検討した椀形高坏一覧（2）

遺跡名	坏部			脚部			文献
	口径	坏部高	暗文	脚高	脚穿孔	脚端部面取	
秋里BⅢ区SX01	15.0	4.4	○	5.8	×	×	〃（図301-128）
秋里BⅢ区SX01	14.9	3.8	○	5.8	×	○	〃（図301-126）
秋里BⅢ区SX01	14.9	3.8	○	6.2	○	○	〃（図302-143）
秋里BⅢ区SX01	14.9	4.0	○	5.0	○	○	〃（図302-146）
秋里BⅢ区SX01	14.9	4.0	○	6.0	○	○	〃（図302-149）
秋里BⅢ区SX01	14.8	4.4	○	6.2	×	×	〃（図301-125）
秋里BⅢ区SX01	14.8	4.0	○	5.4	×	○	〃（図301-131）
秋里BⅢ区SX01	14.7	4.2	×	6.8	×	○	〃（図302-139）
秋里BⅢ区SX01	14.6	4.0	○	7.0	○	×	〃（図302-141）
秋里BⅢ区SX01	14.5	4.0	○	6.0	×	○	〃（図302-133）
秋里BⅢ区SX01	14.5	3.8	○	6.2	○	○	〃（図302-144）
秋里BⅢ区SX01	14.4	4.0	×	6.0	×	○	〃（図302-140）
秋里BⅢ区SX01	14.3	4.0	○	6.8	×	○	〃（図301-124）
秋里BⅢ区SX01	14.3	4.2	○	5.6	×	×	〃（図302-136）
秋里BⅢ区SX01	14.2	3.8	○	5.8	×	○	〃（図301-127）
秋里BⅢ区SX01	14.2	5.0	○	5.2	○	×	〃（図302-142）
秋里BⅢ区SX01	14.2	3.8	○	6.0	○	○	〃（図303-152）
秋里BⅢ区SX01	14.1	4.6	○	5.8	×	○	〃（図301-129）
秋里BⅢ区SX01	14.0	4.2	○	-	○	-	〃（図302-148）
秋里BⅢ区SX01	13.8	4.0	○	6.0	○	×	〃（図302-145）
秋里BⅢ区SX01	13.4	3.4	○	4.6	×	×	〃（図301-121）
面影山76号墳	14.4	4.0	×	5.8	×	×	平川ほか1987（図16-5）
面影山76号墳	14.1	4.0	×	-	-	-	〃（図16-3）
面影山76号墳	13.8	4.4	×	5.4	×	×	〃（図16-6）
面影山76号墳	13.8	4.4	○	-	-	-	〃（図16-7）
面影山76号墳	13.6	3.9	×	5.2	×	×	〃（図16-1）
面影山76号墳	13.2	4.0	×	5.4	×	×	〃（図16-2）
開地谷28号	14.8	4.2	○	5.2	×	×	東方2020（図2-4）
開地谷28号	14.8	4.4	○	-	-	-	〃（図2-5）
紙子谷24号墳	15.8	4.4	○	5.6	×	×	稲浜1994（図10-1）
紙子谷24号墳	15.6	4.5	○	-	-	-	〃（図10-3）
紙子谷24号墳	15.1	4.0	?	5.9	×	×	〃（図10-2）
郷原14号墳	16.7	4.4	○	7.9	○	×	谷口2006（図13-1）
郷原14号墳	15.3	3.8	○	7.5	×	×	〃（図13-2）
郷原1号墳	15.8	4.6	×	5.4	×	×	大村ほか1958（図3-2）
郷原1号墳	15.5	4.2	×	5.0	×	×	〃（図3-4）
郷原1号墳	15.4	4.0	×	-	-	-	〃（図3-1）
倭文6号墳	14.0	4.2	×	-	-	-	山田2004（図29-2）
倭文6号墳	13.8	-	×	4.9	-	-	〃（図29-3, 4）
下味野50号	17.2	3.4	○	6.7	×	○	谷口2004（図14-1）
直浪10次	17.0	4.0	○	7.8	○	×	高田2018（図28-1）
横枕26号墳	14.7	4.7	×	5.4	×	×	谷口2003（図27-1）
横枕26号墳	14.4	4.2	×	5.1	×	×	〃（図27-3）
横枕26号墳	13.8	3.9	×	5.4	×	×	〃（図27-2）
横枕SK02	13.6	4.8	○	5.4	×	×	〃（図182-2）
横枕SK02	12.2	4.0	○	5.6	×	×	〃（図182-3）
横枕73号墳	16.3	4.1	○	6.8	○	×	〃（図165-2）
横枕73号墳	15.6	3.8	○	6.7	×	○	〃（図165-4）
横枕73号墳	15.1	4.1	○	-	-	-	〃（図165-6）
横枕73号墳	14.8	3.2	○	6.8	×	×	〃（図165-1）
横枕73号墳	14.6	3.9	○	6.7	×	×	〃（図165-5）

## V. おわりに

郷原1号墳が帰属すると考えられる古墳時代中期末葉段階については、ここ20年ほどの間に比較的多くの発掘調査例が蓄積されてきた。ところが、これに続く後期初頭から前半期には著しく情報量が減り、土器編年も、古墳編年もわからない部分が多くなるが、このことは、単に調査件数の多寡によるのではなく、考古資料の出方に反映されるような社会変化があった可能性が高いと考えている。小論で紹介してきた資料に関連するところでは、古墳時代後期には、土師器高坏が激減し、その機能は須恵器に代わられるようである。一方、土師器では、脚のない椀や低脚坏が登場し、全体として食器様式の大きな変化があると考えられる。

小論で紹介した郷原1号墳出土遺物は、残念ながら、一部に散逸してしまったものがあり、また、保存状態が危うい鉄製品があるなどして資料保全上の課題を残しているが、時代の転換点を探る手がかりを提供する遺物であることは間違いない。小論が今後の地域史構築の一助となるならば、これに過ぎる喜びはない。

### 謝辞

土師器の実測にあたって、木田いづみ氏の助力を得た。また、紛失資料の探索について、東方仁史氏の協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

### 図出典

- 図1：大日本帝国陸地測量部 25000分の1地形図「用瀬」（明治30年測量，昭和7年修正図）をもとに作成。  
 図2：カシミール3D (<https://www.kashmir3d.com/>) スーパー地形データで作成。  
 図3：『ひすい』第50号掲載図を一部改変して作成。  
 図4：2～4は、『ひすい』第50号掲載図を転載，編みかけを追加。5～10は，谷口2003文献より転載，編みかけを追加。11～13は山田2004文献より転載。  
 図8：土器は谷口2006文献より転載して，網掛けを追加。遺構は一部改変して再トレース。土器の出土状況のみ模式的に示した。

### 註

- 1) 鳥取県東部地域の古墳出土須恵器，鳥取市福部町縁山古墳群出土遺物，鳥取市河原町向羅1号墳出土遺物について報告した（高田2019，高田2020，高田2021）。  
 2) この『報告』は，歴史学研究会の活動報告として刊行さ

れたもので，ガリ版刷り，本文36ページの冊子である。発行年の記載がないので，正確にわからないが，1956年ないし，1957年に発行されたと考えられる。掲載遺跡の全ては、『ひすい』に再掲されているが、『ひすい』とは異なって，学生の課外活動という性格の強い文章や内容となっているほか，写真図版として，6×6版のモノクロベタ焼きが直接冊子に貼付されており、『ひすい』には収録されなかった考古学的情報が得られる。

- 3) 鳥取県埋蔵文化財センター，鳥取県立博物館，鳥取市（旧河原町）教育委員会に資料の探索を依頼したが，見つからなかった。  
 4) 樋口1979文献で「オオカミ山頂」，下垣2003（2011）文献で「オオカミ山頂古墳」とされているものである。  
 5) 小さい破片には，保存処理時につけられたと思しきシールが残っており，「郷原 No.7」と書かれている。大きい破片の方にもシールが残存するが，黒く変色しており番号が読み取れない。「郷原 No.2」の可能性もある。  
 6) 保存処理時につけられたと思しきシールが残っており，刀身には「郷原 No.3」，茎には「郷原 No.4」とある。なお，刀子茎片にはシールがない。したがって，保存処理された鉄製品のうち，少なくとも No.1, 5, 6 とされたものが失われていることになる。『ひすい』掲載図には，説明がなく，番号も付されていない鉄器が描かれており，『報告』掲載写真（PL.1-4）では，鉄器が7点あるようにも見える。現状で本学が所蔵する鉄器の中に該当するものを見つけることはできなかった。

### 文献

- 井殿晴子・藤本隆之・杉谷美恵子・前田均 1996『秋里遺跡』財団法人鳥取市教育福祉振興会  
 稲浜隆志 1994『紙子谷古墳群・宮長竹ヶ鼻遺跡』財団法人鳥取市教育福祉振興会  
 白杵勲 1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号，pp.49-70  
 梅本健治 2013『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（29）一宮の本第20～26・31・32号古墳一』財団法人広島県教育文化財団  
 大村雅夫・森田純一 1958「因幡・郷原1号墳」『ひすい』第50号，佐々木古代文化研究室，pp.1-4  
 河原町誌編集委員会 1986『河原町誌』河原町  
 河原町教育委員会 2004『河原町郷原11号墳発掘調査報告書』  
 小南裕一 2009『朝田墳墓群Ⅷ—Ⅱ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ地区の調査成果—』財団法人山口県人づくり財団山口県埋蔵文化財センター



- 讃岐和夫 1995『亀塚古墳—保存整備事業第2次発掘調査概報—』大分市教育委員会
- 澤田むつ代 2015「古墳出土の鉄刀と鉄剣の柄巻きと鞘巻きの種類と仕様の事例」『文化財と技術』第7号, pp.111-142, 工芸文化研究所
- 下垣仁志 2003「古墳時代前期倭鏡の編年」『古文化談叢』第49集, 九州古文化研究会, pp.19-50（下垣仁志 2011『古墳時代の王権構造』吉川弘文館所収）
- 滋賀県 1961『滋賀県史跡名勝天然記念物報告』第12冊
- 清家章 2010『古墳時代の埋葬原理と親族構造』大阪大学出版会
- 高田健一 2018『直浪遺跡の研究—砂丘遺跡における人間活動と古環境変動に関する考古学的研究—』鳥取大学地域学部
- 高田健一 2019「鳥取大学所蔵の考古資料（1）—古墳時代の遺物：須恵器—」『地域学論集』第15巻第3号, pp.1-12
- 高田健一 2020「鳥取大学所蔵の考古資料（2）—古墳時代の遺物：縁山古墳群出土遺物—」『地域学論集』第16巻第3号, pp.61-66
- 高田健一 2021「鳥取大学所蔵の考古資料（3）—古墳時代の遺物：向羅1号墳出土遺物—」『地域学論集』第18巻第2号, pp.33-48
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 谷口恭子 1991「遺物について—土器—」『岩古遺跡III』鳥取市遺跡調査団, pp.285-308
- 谷口恭子 2003『横枕古墳群II』財団法人鳥取市文化財団
- 谷口恭子 2004『下味野古墳群II・下味野童子山遺跡』財団法人鳥取市文化財団
- 谷口恭子 2006『郷原石堂口遺跡・郷原古墳群』財団法人鳥取市文化財団
- 鳥取県埋蔵文化財センター 1986『鳥取県の古墳』財団法人鳥取県教育文化財団
- 中島弘隆 1986『郷原遺跡発掘調査報告書』河原町教育委員会
- 中原斉 1985『里仁古墳群』財団法人鳥取県教育文化財団
- 東方仁史 2020「開地谷古墳群」『新鳥取県史（資料編）』考古2 古墳時代, 鳥取県, pp.152-155
- 樋口隆康 1979『古鏡』新潮社
- 平川誠・小杉宗雄・船井武彦 1987『面影山古墳群・吉岡遺跡発掘調査概要報告書』鳥取市教育委員会
- 平川誠・前田均 1991『六部山古墳群発掘調査概要報告書』鳥取市教育委員会
- 平勢隆郎 1988『鳥取大学所蔵文化財整理簡報』鳥取大学
- 藤本隆之 2002『下味野古墳群I』財団法人鳥取市文化財団
- 牧本哲雄 1999「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡VIII・園第6遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団, pp.151-160
- 松山智弘 1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相—大東式の再検討—」『島根考古学会誌』第8集, pp.1-29
- 森浩一・松藤和人 1994『糸谷古墳群』同志社大学文学部文化学科
- 山田真宏 2004『倭文所在城跡・倭文古墳群』財団法人鳥取市文化財団
- 横山聖 2020『山手森谷上分遺跡』公益財団法人鳥取市文化財団
- 渡邊可奈子 2010「畿内における古墳時代の刀子」『古代学研究』第185号, pp.21-37
- 和田晴吾 1995「棺と古墳祭祀—『据えつける棺』と『持ちこぶ棺』」『立命館文学』No.542, pp.484-511



5

PL. 1 調査時のようすと行方不明の椀形高坏



PL. 2 有稜高杯の現状と細部





PL. 3 鉄製品の現状